

「真実が歴史の中に」

(マタイ1:1-17)

挽地茂男

2019.12.8 日本基督教団千歳丘教会朝礼拝

今読みましたマタイによる福音書の系図は、聖書を読む時の躓きなるとよく言われます。カタカナの名前が次から次へと続く、無味乾燥で、この部分になくても良いような箇所に思えるからです。文語訳聖書では、新共同訳が〇〇が××を「もうけ」と訳しているところを、「〇〇が××を『生子』」と訳してありまして、「〇〇が××を『生子』」が連続しております。

「アブラハム、イサクを生子、イサク、ヤコブを生子、ヤコブ、ユダとその兄弟らを生子、ユダ、タマルによりてペレスとゼラを生子、ペレス、エスロンを生子、エスロン、アラムを生子、アラム、アミナダブを生子、アミナダブ、ナアソンを生子、ナアソン、サルモンを生子、サルモン、ラハブによりてボアズを生子、ボアズ、ルツによりてオベデを生子、オベデ、



エッサイを生子、エッサイ、ダビデ王を生子。」

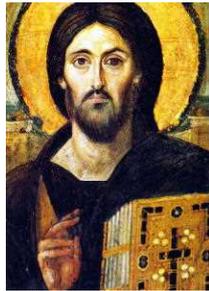
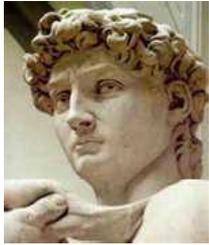
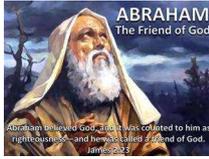
(これでまだ1/3なのです)

このように「〇〇が××を『生子』」が連続するものですから、読んでみると、「生子」疲れてしまう、などと言われたりします。

そこで新共同訳聖書は「生子」を「もうけ」という訳語に替え、一代ごと「〇〇が××を『もうけ』」と繰り返さずに、14代ごとの区分の最初と最後だけに「～をもうけ」、**うみつけれない配慮(?)**をしてあります。新共同訳「アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブを、ヤコブはユダとその兄弟たちを、ユダはタマルによってペレスとゼラを、ペレスはエスロンを、・・・エッサイはダビデ王をもうけた。」

ヘブライ人は系図を重要視します。(記録によると)バビロンに捕虜として連行された訳ですが、このバビロン捕囚の混乱期に系図が不明瞭になった祭司がいて、系図がないという理由で祭司職を剥奪されたという記録が残っています。マタイにとっても系図は大切な意味を持っているのです。ですから、生子疲れしないで、じっくり読んでみると大切な意味が見えて参ります。まずこの系図は、

① 旧約聖書に書かれている救いの物語と新約聖書の—救いの物語である—福音とを結び付ける架け橋としての役割を演じています。そしてマタイは系図を、② 14代ずつ3区分に整理していますが、そこには何か特別な意味が読み取れるような雰囲気も漂っています。



こうして、全部合わせると、アブラハムからダビデまで十四代、ダビデからバビロンへの移住まで十四代、バビロンへ移されてからキリストまでが十四代である (v. 17)。

日本も系図はそれなりの名家では、大切にされるものであります。先の靖国神社の宮司をしておられた徳川康久さんは、わたしが國學院の神道学科で教えているときの生徒さんで、



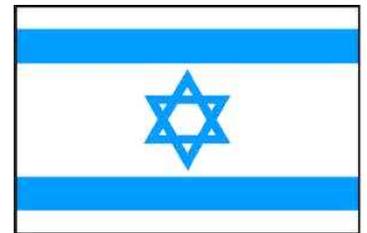
徳川康久

みんなから「徳川さん、徳川さん」と特別な視線を浴びせられていたのを思い出

します。彼は徳川慶喜の曾孫でして、彼の系図を聖書風に言えば、「徳川家康の子、徳川頼房〔家康の子で初代水戸徳川家の藩主、水戸光圀は頼房

の三男で第二代藩主〕の子(子孫)、徳川慶喜の子(子孫)、徳川康久の系図」と言ったところです。

主イエスの系図の表題(タイトル)となっている「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」という言い方は、アブラハムとダビデというイスラエルの歴史の中心人物を経てキリストが誕生したと語っています。民族と信仰の祖であるアブラハムから、ダビデによる国家建設に向かう民族の隆盛期、ダビデからバビロン捕囚に向かう、民族の下降期・没落期。さらにバビロン捕囚以降、民族再興を模索する混迷期を含む、興隆から没落に至る民族の歴史を経て、「アブラハムの子」とよばれ「ダビデの子」と呼ばれる、イスラエルの信仰と王権を象徴するような救い主、しかも民族の没落を通過して、メシア(キリスト)が生まれたと言っているのです。「イエス」というギリシア語の名前は、旧約聖書、ヘブライ語では「ヨシュア」という名前に当たります。意味は「ヤハウエ(主なる神)は救い」という意味です。マタイは今や、イスラエルの民を救う救い主が生まれ



たと告げるのです。

さて「**アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図**」という言葉には、四つ大切な意味が含まれております。まず、①この「**アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図**」の「系図」(Βίβλος γενέσεως)という言葉は、二つの単語からできている言葉で、一つは Βίβλος (ビブロス=本、書物) もう一つが γένεσις (ゲネシス=創造)という言葉です。英語に直訳すれば“Book of Genesis”

「創造の書」、旧約聖書で言えば、「創世記」ということになります。ですから、「**アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図**」は「**アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの創造の書(創世記)**」という意味で、今まさに、アブラハムの信仰に始まり、ダビデによって確立された、信仰の王国が、バビロン捕囚に象徴される民族の没落を経て再創造される、神の国がイエス・キリストにおいて再創造されつつある、と語っているのです。旧約聖書の「創世記」で世界の創造と共に、人、アダムが創造されます。「**アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの創世記**」では、新しいアダム(キリスト)が創造され、新しい神の民

の創造が開始されるのです。

また、②「ゲネシス」という言葉の意味をヘブライ語にたどりますと、「世代」とか「歴史、継続する物語」という意味があります。つまり、単に主イエスの先祖を示す系図ではなく、連綿と続く民族の歴史を示す物語なのです。つまり「**アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図**」は、「**アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの歴史の書**」という意味なのです。マタイ福音書はアブラハムから始まります。主イエスの物語は、この長いイスラエルの歴史の継続であり、到達地点であり、完成なのです。



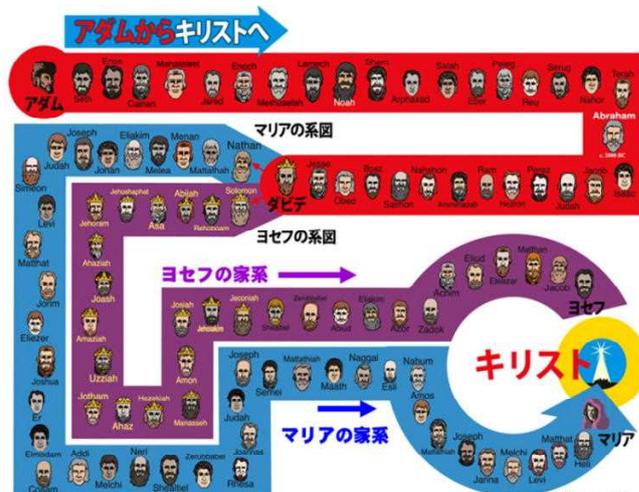
また、③この「ゲネシス」という言葉には、「継続する生命と存在」という意味があります。これが系図という意味に最も近い意味です。後に続く「世代」がその「生命と存在」を継承する。つまり「**アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図**」は、「**アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの継続する生命と存在の書**」なのです。マタイ福音書においてイエス様の「生命と存在」は、福音書の物語の中に継続

されるだけではなく、後の教会の物語へ、そしてわたしたちの教会の物語へと継続されるのです。

また、④「ゲネシス」という言葉には、当然、「誕生」、「起源」、「はじまり」という意味があります。ですから、「**アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図**」は、「**アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの起源の書**」となります。マタイが語る主イエスの物語は、教会の中で継続して語り継がれるキリストの救いの起源を語り、起源を起源たらしめている神を語ります。そして語り継がれることによって、主イエスが教会と共にある方として経験されていくのです。

1節の表題が終わると、2節から16節まで、連綿と人々の名前が列挙されていきます。すでに言いましたように、系図全体が14代からなる三つの時期に整理されていて、合計42世代〔実際は41世代〕の人々から成る系図であることが分かります。しかしルカによる福音書の系図と比較されるとわかりますが、ルカの系図ではアブラハムよりもさらに古いところの最初の人アダムに向かって伸びていて全体で77代になっていま

す。その77代のうち、ルカ福の系図では、アブラハムからイエスまでが、56代になっているのです。しかもマタイとルカで共通している人物は、56名中のわずか14名で、他はすべて違うのです。これはどうしてこうなるのかを少しだけ説明しますと、アブラハムからダビデまでを14代と数える伝統がかなり古くからあり、それは、すでに歴代誌上1-12章に明らかに見られます。マタイ福音書は、この14代を構成原理として、系図全体を構成しているのです。そのために、実際には、ダビデからバビロン捕囚までには18代の王様が続くのですが、マタイは14代にそろえるために、4人の王様を除いています。このことに気づく時、聖書の系図が、かなり自由に筆を加えられ、その機能



But ルカの系図＝マリアの系図は誤り, see Lk3:23-38

が古代の正確な歴史を示すことにあるのではないことが分かります。つまり系図は系図的データを発見しようとする伝記的な努力の結果ではなく、歴史の意味を示そうとする努力の結果であることが、明らかになるのです。その意味で聖書は、「人間と神の書」なのです。聖書には人の個性や、(時には人間的な錯誤を通して)、また文化的背景など、さまざまな人間的要素を通して、聖書はなお、神を伝えようとする意味で、「人間と神の書」なのです。

ではマタイがこだわった14と言う数字はどういう意味をもつのでしょうか。三つくらいの意味が

Jesus Genealogy According to Matthew		
1. Abraham	15. Solomon	29. Shealtiel
2. Isaac	16. Rehoboam	30. Zerubbabel
3. Jacob	17. Abijah	31. Abiud
4. Judah	18. Asa	32. Eliakim
5. Perez	19. Jehosaphat	33. Azor
6. Hezron	20. Jehoram	34. Zadok
7. Ram	21. Uzziah	35. Achim
8. Amminadab	22. Jotham	36. Eliud
9. Nahshon	23. Ahaz	37. Eleazar
10. Salmon	24. Hezekiah.	38. Matthan
11. Boaz	25. Manasseh	39. Jacob
12. Obed	26. Amon	40. Joseph
13. Jesse	27. Josiah	41. Jesus
14. David	28. Jeconiah	

Matthew 1:1-17		
1. Abraham	1. Solomon	1. Jechonias
2. Isaac	2. Rehoboam	2. Salathiel
3. Jacob	3. Abia	3. Zerubbabel
4. Judah	4. Asa	4. Abiud
5. Phares	5. Josaphat	5. Eliakim
6. Esrom	6. Joram	6. Azor
7. Aram	7. Ozias	7. Sadoc
8. Aminadab	8. Joatham	8. Achim
9. Naeson	9. Achaz	9. Eliud
10. Salmon	10. Ezekias	10. Eleazar
11. Booz	11. Manasses	11. Matthan
12. Obed	12. Amon	12. Jacob
13. Jesse	13. Jasia	13. Joseph
14. David	14. Jechonias	14. Jesus

So all the generations from Abraham to David are fourteen generations and from David until the carrying away into Babylon are fourteen generations and from the carrying away into Babylon unto Christ are fourteen generations.

無理に辻褃を合わせると新たな誤りを生み出します

考えられます。聖書では「7」は「完全数」と呼ばれます。14はその「7」の2倍で、全き完全を表すと言われます。ですから、マタイは14代×3の42代、ルカではアブラハムよりもさらに古いところに向かって伸びていて、系図の全体が77代で構成されています。つまり、7の倍数で系図が構成されているのです。聖書を書いた人々が、歴史に「完全」を読み込んだのです。神が働かれる場と考えるからです。しかもマタイは14代を三回繰り返しますが、実は系図の最後の14代は、正確に数えると13代しかありません。そのような人間的錯誤をも神はお用いになるのです。聖書は神と人間の書なのです。

次に考えられるのは、旧約聖書の「ヨベルの年」との関係です。

Patrilineage of Jesus according to Matthew		
1. Abraham	15. Solomon	29. Shealtiel
2. Isaac	16. Rehoboam	30. Zerubbabel
3. Jacob	17. Abijah	31. Abiud
4. Judah and Tamar	18. Asa	32. Eliakim
5. Perez	19. Jehoshaphat	33. Azor
6. Hezron	20. Jehoram	34. Zadok
7. Ram	21. Ahaziah	35. Achim
8. Amminadab	22. Jotham	36. Eliud
9. Nahshon	23. Ahaz	37. Eleazar
10. Salmon and Rachab	24. Hezekiah	38. Matthan
11. Boaz and Ruth	25. Manasseh	39. Jacob
12. Obed	26. Amon	40. Joseph
13. Jesse	27. Josiah	41. Mary
14. David and Bathsheba	28. Jeconiah	42. Jesus

マリアを系図に組み込むなら、他の4人の女性も、となります

旧約聖書の律法の規定では、7年に一度安息年が定められています。それは7年に一度、田畑を休ませて土地の生産力を回復させる休耕の年なのです。そして、その7年を7倍した、7×7の49年の次の年、50年に一度が「ヨベルの年」と呼ばれています。その箇所の規定を引用しておきます。レビ25章8節以下です。

25:8 あなたは安息の年を七回、すなわち七年を七度数えなさい。七を七倍した年は四十九年である。25:9 その年の第七の月の十日の贖罪日に、雄羊の角笛を鳴り響かせる。あなたたちは国中に角笛を吹き鳴らして、25:10 この五十年目の年を聖別し、全住民に解放の宣言をする。それが、ヨベルの年である。〔中略〕25:13 ヨベルの年には、おのおのその所有地の返却を受ける。〔中略〕25:28 しかし、買い戻す力がないならば、それはヨベルの年まで、買った人の手にあるが、ヨベルの年には手放されるので、その人は自分の所有地の返却を受けることができる。

「ヨベルの年」には、借金が棒引きにされるのです。借金のカタに取られた土地や、債務奴隷として取られた家族が解放されるのです。つまり

貧しい者は財産を取り戻し、奴隷は解放を与えられる。民族的な休耕年、民族の活力をもう一度取り戻すとき、人々にとって「解放の年」、「喜びの年」に当たるのです。主イエスの系図は、 $14 \times 3 = 42$ 代。つまり14は7×2で、14が3回繰り返されますから、7×6と考えられます。イエス・キリストは7の繰り返しが7回目を迎える時代（つまり7×7の時代）に到来することになるというわけです。主イエスの到来は、7×7、**ヨベルの年の到来**を象徴する、人々に開放を告げるときの象徴だと言われるのです。

そしてもう一つは、**14という数字が = 𐤃𐤃 DUD** (ダビデ) を表しているということです。これは数値転換 (ゲマトリア) と言いまして、文字が数を表すのです。わたしたちが現在使うアラビア数字、つまり今は当たり前を使う0, 1, 2, 3...9の数字、

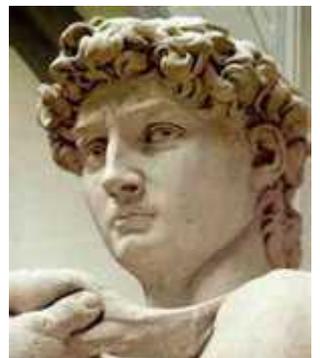
1	2	3	4	5	6	7	8
A	B	C	D	E	U	O	F
I	K	G	M	H	V	Z	P
Q	R	L	T	N	W		
J		S			X		
Y							

数値転換表 (カリオストロ版)

算用数字は、8世紀に、インドからアラビアに伝わります。「0 = 空」の観念が伝わったことが文明史的には決定的に重要な事とされます。）そして10, 11世紀にアラビアから西ヨーロッパに入ります。つまりインドに始まってアラビア人がヨーロッパに伝えたところから、アラビア数字というのです。このアラビア数字が伝わる以前は数は文字で表されていました。ですから人の名前を数で表すということもされたのです。有名なところでは、“666”という数字があります。不吉な数字、悪魔の数字とも言われますが、黙示録の13章8節に出てきます。この数字は、キリスト教を迫害したローマ皇帝ネロをさしていると言われます。「קס"ב' ו'קס"ב'」とヘブライ語表記にして、これを数値に転換してゲマトリアで表記すると「666」になるのです。ダビデは三つの文字、英語でいえば、Dにあたるダレット（数価は4）、そしてUにあたるウァウ（数価は6）、そしてまたDにあたるダレットの三文字で表されます。そしてこれを数値に転換すると、4 + 6 + 4の14になるのです。アブラハムからダビデまで14代（つまりダビデが隠された水脈のよう

に流れているのです）。そしてダビデからバビロン捕囚までが14代（暗にダビデを包み込みます）。そしてバビロン捕囚からイエスまでが14代（ダビデを暗示するのです）。

そして新約聖書で、イエス・キリストが「ダビデの子」（ダビデの子孫）と呼ばれるのも、気まぐれではないのです。「ダビデの子」という呼び方は、聖書では救い主を呼ぶ呼び方、称号、メシア（キリスト）称号の一つなのです。ダビデはいろいろと問題のあった人でもありますが、イスラエルの理想的の王とされます。彼はメシアと呼ばれます。イスラエルではメシアとは、最初、民を国難から救う、軍事的・政治的な救い主なのです。その王様が即位するときに、即位の儀礼として王様の頭に油を注いだのです。メシアとは「油注がれた者」という意味です。ダビデ以降、イスラエルが国際情勢で危機的な状況に陥ったり、国内的な混迷の時代には、ダビデのような救い主が到来する事が待望されます。その待望が「**ダビデの子**」という表現に表れているのです。やがてイスラエルの歴



史の中で、このメシアが超越的な要素を強めていくことになります。そのことは、またの機会におはなせできればと思いますが、マタイの系図が、ルカの系図と比較しても、ダビデ王朝を中心に系図を構造化している〔ルカの系図には王朝史がない〕ことは明らかです。アブラハムからダビデ王朝の確立に至る王朝の興隆と、ダビデからバビロン捕囚に至る王朝の没落と、さらにバビロン捕囚以降のイスラエルの歴史のどん底の時代を経て、やがて軍事的でもない、政治的でもない



© Can Stock Photo - csp17069003

い救い主が「ダビデの子」として待望されてくる時代がやってきます。マタイはそれが「今だ」と言っているのです。マタイは、系図を圧縮しながら、歴史を一挙に掴みとって、構造的転換点をダビデの即位と捕囚期のダビデ的王位の喪失に置き、「ダビデの子」待望を背景に、真の「ダビデの子」の到来、キリスト（メシア）・イエスの誕生を語



るのです。

しかしこの系図にはもう一つ注目しておかなくてはならないことがあります。それは、系図上に5人の女性が登場していることです。主イエスの5000人の供食物語で、食べて満足した人の数を記すのに、あえて「女と子どもを除いて5000人」と表記するマタイが、女性たちに言及していることは特筆に値します。しかも、それらの女性はある種の「そしり」の可能性を持った異邦人女性たち（マリアを除くとすべて異邦人）なのです。

まず1人目は3節。「1:3 ユダはタマルによってペレツとゼラを、ペレツはヘツロンを、ヘツロンはアラムを、…」タマル（v.3）は創世紀38章1－7節に出てきます。タマルはカナン人であり、若死にしたユダの長男エルの妻でした。ユダヤの掟では、夫が死ぬと、残された妻は夫の兄弟と結婚をして跡継ぎを残します。しかし舅（父親/家長）であるユダは、彼女の再婚〔死んだ長子エルの兄弟の妻となる、つまりレビラト婚〕を認めませんでした。そこで彼女は〔遊女に身をやつして〕ユダをだまし、ユダと関係を結んでユダの子どもを生む

のです。そしてこの息子ペレツがメシアの家系となる系列に編入されているのです（創38:8-30）。しかし舅ユダは彼女の行為を「正しい」と宣言します（創38:26）。そしてこの「正しい」という言葉は、マタイのイエス誕生物語における鍵の言葉なのです（1:19参照、NIB）。マタイでは「正しさ」は、律法の文言を墨守する硬直した正しさではなく、柔軟であり、柔軟であるがゆえに本質的に厳しさをもった「正しさ」なのです。

つぎに2人目と3人目は5節。

「1:5 サルモンはラハブによってボアズを、ボアズはルツによってオベドを、オベドはエッサイを、…」ラハブとルツが出てまいります（v.5）。ラハブは、ヨシュア記2-6章に登場する、エリコという土地にいた遊女です。マタイは、わたしたちが知る限りでは、遊女ラハブをダビデの家系に挿入した最初の人物なのです。なぜなら旧約聖書にも、現存するユダヤ教資料にも、その他の初期のキリスト教文献にも、ラハブに関する言及がないのです。ラハブの重要性は、タマルと同じく彼女が異邦人であったということに加えて、家系上は汚点に

なる人物であったということにあります。

マタイの系図では、このラハブはルツの夫ボアズの母でお姑さんに当たります。このラハブとルツの間には200年くらいの時間的な隔たりがあります——ルツが「あなたのお義母さんはおいくつ」と聞かれたら、「200歳をちょっと越えたところ」とこたえなければなりません——が、マタイの系図ではそれが一気に圧縮されています。旧約聖書の年代記では、ラハブは出エジプトしたイスラエルの民が夜シュアに導かれてカナン（現在のパレスチナ）を征服の時期に属しています（ヨシュ2-6章）。他方、ボアズとその妻ルツはラハブからほぼ200年後の時代に生きていた人物なのです（ルツ2-4章、NIB）。

ルツ（v.5）も外国人で、モアブ出身の異邦人であったとされるされています。モアブ人というのは、この時代から十世代後の時代になっても、イスラエル人共同体から特に排除されていたことが分かり



ます（申23:3、ネへ13:1参照、NIB）。子どもを妊娠すれば、死罪か追放を免れません。つまり、この系図に現れた女性たちは、いずれも「そしり」を受ける可能性をもった女性たちなのです。

そして4人目は6節。「1:6 エッサイはダビデ王をもうけた。ダビデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ、…」ウリヤの妻は、サムエル記下11章、12章に出てきます。名はバト・シェバ。「ウリヤの妻」はもともとイスラエル人でありましたが、彼女がヒッタイト人と結婚したために、一度異邦人と結婚すると、後のラビ律法では異邦人と見なされます（NIB）。ダビデは彼女を部下のウリヤから略奪します。そのために激戦地に彼女の夫ウリヤを派遣し戦死させたのです。ダビデもまた誤り多き一人の人なのです。

そして5人目は16節。主イエスの母マリアです。「1:16 ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった。」マリア（v. 16）は世間的に言えば、未婚の母です。許嫁がいる立場で、他の男性の

つまり、この系図は、全体を包み込むような〈包括性〉に富んでいることが分かります。メシアの物語は包括的で、あらゆる国の男女に及んでいるのです。原則的に父系によってたどられる系図に、5人の女性すなわちタマル、ラハブ、ルツ、「ウリヤの妻」、マリア（いずれも、ある種の「そしり」を受ける可能性を持ち、中には疑わしい性的行動に関係している女たち）が登場します。彼女たちはマリア以外はみな異邦人。神の働きは、時として、変則的でスキャンダラスなのです。そこでは、ありていな倫理は超えられているのです。

マタイが福音書の冒頭に記したこの系図は、イスラエル民族の歴史を圧縮した縮図です。そしてマタイは、その歴史を通して、決して清らかでも、完璧でもない人間たちの歴史を通して、イスラエルの隆盛と没落の極みを通して、メシア（キリスト）が誕生したと語る



のです。そして生まれてくるイエスによってイスラエルの目的と希望が成就される。イエスの物語は神の救済活動の物語、神の救いの歴史の一部（その中心的で、決定的な一部）なのです。救い主であるメシア（キリスト）はこの救済劇に新参者として歴史の舞台にふらりと登場するのではなく、過去の神の救いの歴史との連続線上に登場します。歴史の意味の完成がキリストにおいて実現した、とマタイは語るのです。

系図は、主イエスが王的メシア、つまり「ダビデの子」であることを強調しています。この系図は王家の物語なのです。しかし十字架上で「ユダヤ人の王」として処刑されていく主イエスは、すべての人を救いに包括するすのみならず、王位そのものの意味をも再定義してしまいます。彼は、王座ではなく、十字架に即位する王だからです。僕である王なのです。

この系図は神がその神的な目的を成就するために、通常の人間の現実を通して働かれる、ということを示しています。つまりこの系図は、神が隠れた歴史の行為者であることを示します。アブラハム

からイエスへと繋がる物語、つまり約束からその成就に至る歴史（物語）の全体において能動的に働いておられるのは、神なのです。神は、普通の人々の普通の生涯を通して働きかけ、また時には、例外的な仕方で行動されるのです。

わたしたちもまた、歴史に働いてこられた神様を、また、わたしたちの生きる世界・社会に今も働いておられ神様を、信頼することができますように。神を静かに思う、「静思の時」は、わたしたちの視野を開きます。わたしたちの「普通の」生活の中に、「普通に」働いておられる神様を、信じ・見いだすことができますように。そして、わたしたちも、神様の大きな計らいを憶えつつ、アドヴェントの新たな一週間を始めたいと思います。祈りましょう。

2019.12.8 日本基督教団千歳丘教会朝礼拝



1:1 アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図。

1:2 アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブを、ヤコブはユダとその兄弟たちを、

1:3 ユダはタマルによってペレツとゼラを、ペレツはヘツロンを、ヘツロンはアラムを、

1:4 アラムはアミナダブを、アミナダブはナフションを、ナフションはサルモンを、

1:5 サルモンはラハブによってボアズを、ボアズはルツによってオベドを、オベドはエッサイを、

1:6 エッサイはダビデ王をもうけた。ダビデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ、

1:7 ソロモンはレハブアムを、レハブアムはアビヤを、アビヤはアサを、

1:8 アサはヨシャファトを、ヨシャファトはヨラムを、ヨラムはウジヤを、

1:9 ウジヤはヨタムを、ヨタムはアハズを、アハズはヒゼキヤを、

1:10 ヒゼキヤはマナセを、マナセはアモスを、アモスはヨシヤを、

1:11 ヨシヤは、バビロンへ移住させられたころ、エコンヤとその兄弟たちをもうけた。

1:12 バビロンへ移住させられた後、

エコンヤはシャルティエルをもうけ、シャルティエルはゼルバベルを、

1:13 ゼルバベルはアビウドを、アビウドはエリアキムを、エリアキムはアゾルを、

1:14 アゾルはサドクを、サドクはアキムを、アキムはエリウドを、

1:15 エリウドはエレアザルを、エレアザルはマタンを、マタンはヤコブを、

1:16 ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった。

1:17 こうして、全部合わせると、アブラハムからダビデまで十四代、ダビデからバビロンへの移住まで十四代、バビロンへ移されてからキリストまでが十四代である。

1·1 Βίβλος γενέσεως Ἰησοῦ Χριστοῦ
υἱοῦ Δαυὶδ υἱοῦ Ἀβραάμ.

1·2 Ἀβραάμ ἐγέννησεν τὸν Ἰσαάκ,
Ἰσαάκ δὲ ἐγέννησεν τὸν Ἰακώβ,
Ἰακώβ δὲ ἐγέννησεν τὸν Ἰούδαν καὶ
τοὺς ἀδελφοὺς αὐτοῦ, 1·3 Ἰούδας δὲ
ἐγέννησεν τὸν Φάρες καὶ τὸν Ζάρα
ἐκ τῆς Θαμάρ, Φάρες δὲ ἐγέννησεν
τὸν Ἑσρώμ, Ἑσρώμ δὲ ἐγέννησεν τὸν
Ἀράμ, 1·4 Ἀράμ δὲ ἐγέννησεν τὸν
Ἀμιναδάβ, Ἀμιναδάβ δὲ ἐγέννησεν
τὸν Ναασσών, Ναασσών δὲ ἐγέννησεν
τὸν Σαλμών, 1·5 Σαλμών δὲ
ἐγέννησεν τὸν Βόες ἐκ τῆς Ῥαχάβ,
Βόες δὲ ἐγέννησεν τὸν Ἰωβὴδ ἐκ τῆς
Ῥούθ, Ἰωβὴδ δὲ ἐγέννησεν τὸν
Ἰεσσαί, 1·6 Ἰεσσαί δὲ ἐγέννησεν τὸν
Δαυὶδ τὸν βασιλέα. Δαυὶδ δὲ
ἐγέννησεν τὸν Σολομῶνα ἐκ τῆς τοῦ
Οὐρίου, 1·7 Σολομών δὲ ἐγέννησεν
τὸν Ῥοβοάμ, Ῥοβοάμ δὲ ἐγέννησεν
τὸν Ἀβιά, Ἀβιά δὲ ἐγέννησεν τὸν
Ἀσάφ, 1·8 Ἀσάφ δὲ ἐγέννησεν τὸν
Ἰωσαφάτ, Ἰωσαφάτ δὲ ἐγέννησεν τὸν
Ἰωράμ, Ἰωράμ δὲ ἐγέννησεν τὸν
Ὀζίαν, 1·9 Ὀζίας δὲ ἐγέννησεν τὸν
Ἰωαθάμ, Ἰωαθάμ δὲ ἐγέννησεν τὸν
Ἀχάζ, Ἀχάζ δὲ ἐγέννησεν τὸν
Ἐζεκίαν, 1·10 Ἐζεκίας δὲ ἐγέννησεν
τὸν Μανασσῆ, Μανασσῆς δὲ

ἐγέννησεν τὸν Ἀμώς, Ἀμώς δὲ
ἐγέννησεν τὸν Ἰωσίαν, 1·11 Ἰωσίας
δὲ ἐγέννησεν τὸν Ἰεχοϊαν καὶ τοὺς
ἀδελφοὺς αὐτοῦ ἐπὶ τῆς μετοικεσίας
Βαβυλῶνος. 1·12 Μετὰ δὲ τὴν
μετοικεσίαν Βαβυλῶνος Ἰεχοϊας
ἐγέννησεν τὸν Σαλαθιήλ, Σαλαθιήλ δὲ
ἐγέννησεν τὸν Ζοροβαβέλ, 1·13
Ζοροβαβέλ δὲ ἐγέννησεν τὸν Ἀβιούδ,
Ἀβιούδ δὲ ἐγέννησεν τὸν Ἐλιακίμ,
Ἐλιακίμ δὲ ἐγέννησεν τὸν Ἀζώρ,
1·14 Ἀζώρ δὲ ἐγέννησεν τὸν Σαδώκ,
Σαδώκ δὲ ἐγέννησεν τὸν Ἀχίμ,
Ἀχίμ δὲ ἐγέννησεν τὸν Ἐλιούδ, 1·15
Ἐλιούδ δὲ ἐγέννησεν τὸν Ἐλεάζαρ,
Ἐλεάζαρ δὲ ἐγέννησεν τὸν Ματθάν,
Ματθάν δὲ ἐγέννησεν τὸν Ἰακώβ,
1·16 Ἰακώβ δὲ ἐγέννησεν τὸν Ἰωσήφ
τὸν ἄνδρα Μαρίας, ἐξ ἧς ἐγεννήθη
Ἰησοῦς ὁ λεγόμενος Χριστός. 1·17
Πᾶσαι οὖν αἱ γενεαὶ ἀπὸ Ἀβραάμ
ἕως Δαυὶδ γενεαὶ δεκατέσσαρες, καὶ
ἀπὸ Δαυὶδ ἕως τῆς μετοικεσίας
Βαβυλῶνος γενεαὶ δεκατέσσαρες, καὶ
ἀπὸ τῆς μετοικεσίας Βαβυλῶνος ἕως
τοῦ Χριστοῦ γενεαὶ δεκατέσσαρες.